
Garbage Collect ~ゴミだめからの小さな話~

貂寡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Garbage Collection ~ゴミだめからの小さな話~

【著者名】

Z3988D

【作者名】

貂寧

【あらすじ】

「それは、日常生活で必ずしも出でしまう物。そんなゴミの中で生きていく風魔と竜巣の本当か嘘か解らない童話のようなお話です。妄想?が好きなだけかもしれませんね。

「ミミ、それはいつしか溜まって行く物……

捨てないと増えていく物。私は、その中で生きてる。

私の周りには、いつもミミの山ができるて……ミミがこの世を支配している。

私が生きていくためには、このミミたちをどう利用してどう処分するか……

何気なく生きていくことができないこの世界。

人間は、ミミと共存して生きている。

昨日、先生が明日転入生が来るから……と言つて嬉しそうにしていた。

その嬉しそうな表情に、クラスのほぼ全員がザワザワと騒いでいた。俺も例外では無い。

しかし、今日学校に登校してくると……

クラスの雰囲気が昨日と比べよつがないほど shinmuri と、静かにしていた。

朝、ホームルームの時間を知らせるチャイムが鳴る。

しかし、先生は来ない。そうしてこりゅううちに一時間目の授業が始まっている。

そして5分休憩の時間。

後ろの席の奴が話しかけてくる。

「オイ、竜凪……転校生来ないなーなんかあったのかなー」

「それがどうかしたか……?」

少しイラッとしたので冷たく返す。

「冷たつ・・・イライラオーラが漂つてくるよー」

「は、おまえ男だろなんだよその口調は・・・」

もつとイライラしていく。本当に転入生なんかこんな田舎の中華に来るのだなつか。

「いいじゃん。けつこううちの方が喋りやすいんだよー！！」

「…ってなんだ。それより転校生なんて本当に来るのか?」

疑問をぶつける。

「そんなん知らないよーそれより、なんか暇！！」

暇つてなんだ暇つて・・・5分休憩なんだからちょっとは考えよう。

「そんな」と呟つたつて――

変な会話を後ろの席の奴と繰り返していると教室の備え付けの電話が鳴った。

事務室や職員室につながっている電話だ。

それを学級委員長が取る。

「はいもしもし・・・はい、
はい
はい解りました。」

その間にクラスがシーンと静かになる。

電話を終えた学級委員長は、席に座る。すると俺の後ろの間抜けな

女たる心

学級委員長がすかさず答える。

「転入生が来るのです。」

「人生が死んでしまう間はかうど生活がてその間はお話をしますよ。」その言葉を聞き終えるより早くクラスが騒がしくなり始めた。

後ろの間抜けが話しかけてくる。

「オイ、竜凪・・・聞いたか転入生来るんだってよ。

男かな、女かな女やつたら超美女がいいんやけどなー」

「そんなこと知るか？この女詭し。

テンションが高くなつていいく、今さつきのイライラが打ち飛んだよ
うだった。

「女誑じじやないよー女の子がよつてくるだけだもん。」

「いっは、あり得ない嘘をついてる。」

女誑しは合うが、女の子がよつてくるのは断じて本当ではない。どちらかというと女の子に猛烈アピールをして2股を架けられる奴だ。

ちなみに名前は、間抜け第1号。俺にしては、良いネーミングだと思う。

「何で、俺が間抜け第一号なんやねん！！」

勝手につっこみを入れてくる。しかも関西弁で・・・

言つて置くがここは、関西でもなく都会でもないただの田舎の中学校だ。

「自己紹介をしよう。俺の名前は、加賀灘雄馬

今度から雄馬って読んでくれー」

誰に向かって自己紹介しているんだこの間抜け第1号は・・・

「雄馬だ！！」

「解つた・・・解つた・・・どう・・・どう。」

「馬か。まあ雄馬だからなー良いとしよう。」

こいつは、本当にアホなんだ。

小学の頃からけつこう連んでいるが溝に落ちるは、犬とケンカするはで俺にしても迷惑極まりない存在。そして頭脳はこの学校ピカイチと言われるほど悪く。高校受験は、大丈夫なのかと言つほどだ。

あつ、そうだつた俺の名前まだ言つていなかつたな。

そう、俺の名前は、竜凪隼人

間抜け第1号からは竜凪つて呼ばれている。

頭は、間抜けよりは良い。クラスで半分より上の方・・・

顔には、自信がないがまあまあ、もてる?

スポーツはけつこう得意、特に水泳とサッカー。

まあそんなところだろつ。ツて誰に自己紹介しているんだ俺は・・・

？？

「オイ、竜凪・・噂の人物登場。」

そう間抜け第1号が言つたので、教室の入り口を見る。

そこには、担任の先生が立つていた。

「おお、みんな席に着いたなー」

女の先生なのに、なぜか男口調の先生は黒板に名前を書き出した。

【長沢風魔】 黒板にそう書かれた。

「オイ、長沢入つてきて良いぞ。」

何所にでもありそうな、転入生の迎え方だつたはずなのに・・・

入つてきた少女に目が釘付けに為つた。

黒くてつややかな長い髪、そして潤んだ黒真珠のような瞳・・・

肌は、日に当たらなかつたように白くもちもちしていそうな感じで・

・

なんと言えばよいのだろう、本当に日本人の美しさを集めてきたようなお人だつた。

「長沢風魔」と言います。仲良くしてくださいね。」

声は、澄んだ泉のように美しく小鳥のようなかわいさを持っていた。にっこりつと笑つている彼女は本当に日本人だつた。

「誰か質問は、無いかーこんな美人と会話できるのは、今日だけと思えー」

先生が、本当に嬉しそうに言つ。

俺は、質問したいことがたくさんありすぎて手も挙げられないが、その代わりに間抜け第1号が質問をする。今は、間抜けじゃなくつて救世主だ！！

「はい！！」

「加賀灘君どうぞ。」

「長沢さんは、どこから來たんですか。」

その質問に笑顔で答える彼女。

「えっと。都会の方です。あとは、ひ・み・つ……」

なんだか曖昧な考え方だが・・・

最後の部分は、俺を含めてこのクラスいやこの学校のすべての男子を魅了したに違いない。

危ない危ない、俺は自分を取り戻すために一度田をつぶつた。

これは、夢に違いない。こんな田舎の学校にこんな美人が来るわけがない。

夢だ夢。今から田を開けるとそこには、彼女の姿はなく事業中の真っ最中だ。

行くぞーさんはい。

俺は、田を開けた。そこには、やつぱり彼女がいて・・2時間田の学活終了30分前だった。

神様ありがとーこんなにも美しい彼女をこんな田舎に送り込んでくれて。そして俺の隣に座らせてくくれて。

こんな事を言つのは、先生が俺の隣の席を示して、彼女に座るようになに言つたからだった。

自己紹介などは、自分たちであるよつこと先生はめんじくせんつと言つた。

後ろの間抜け第1号は、つれしさのあまり氣絶し今保健室で寝ているだろう。

もう始まっているであろう、男同士の彼女争奪戦に間抜け第1号は乗り遅れた。

私は、『』の中で生きていた。

母がこの環境は悪いと田舎に転校するように求めたので私は、『』

に転校してきた。

自分は、汚いと思う。いやになつたら逃げられるこの世の中で逃げてきてしまつたからだ。

ゴミは、捨てれば良かつたのに捨てられなかつた。

そして今ここにいる。

どうしたらゴミが捨てられるようになり、そしてゴミを出すなようになるのだろう。

転校してきたこの学校でも私は、ゴミをたくさん出すだらう。そして母がまた転校しようところのだろう。

本当に私は、汚い。

俺は、隣の彼女を気にせずに事業に取り組む。

彼女は、少し悲しそうな目で机の上の消しゴムを見ていた。

今は、夏。外では、うるさいセミたちが鳴いている。

この表現おかしいな、と俺は、消しゴムでノートに書いた字を消す。

毎日がこの繰り返し。

先生が言つこと、黒板に書くことをノートにどんどん書いていく。

書くのは、良いけどそのあと疲れが出てくる。

5分休憩の時間にその疲れを間抜けとはなす事で解消する。

いつもこんな調子。そしていつの間にか家路につく。

俺の机の上には、消しカスがたまりに溜まつっていた。

次の5分休憩で捨てないとな。

机の上の消しゴムを手に取る。

私は、ある人の観察をしていた。

まだ名前は言えないがこのクラスの人間だ。

なぜ観察をするようにと言われたのかは解らない……

ただ私のためになることだと母は、言っていた。

どういうためになるのか解らない……

今彼は、消しカスを持つてゴミ箱の前まで歩いていった。

私は、その様子を見る。

消しカスがゴミ箱に落ちる。

それは、私にとつて一番不思議な光景だつた。

母が言つていたのは、このことだろうか……

俺は、誰かに見られていると思ったがすぐにその感覚は消え去つた。
間抜けは、保健室から帰つてきており、また話をする。

「間抜け第1号・・おまえアホだな。」

「アホって言うな。」

「だつて気絶してしまうんだよなー俺よりも近くないくせに。」

「つるさいなー俺は、恋をしたんだよーーそう、あの絶世の美女
風魔さんに！……」

「アホがなんか言いよる。ばかじやー」

なぜかそそのかしたくなる。間抜け第1号が恋をしたと言つたから
だろうか。

俺は、もう気付いているはずだつた。俺は、間抜けと一緒に惚
れをしたことを。

この感覚は、よくわからないものだと俺は、思つ。
何が恋だ、何が愛だ・・・そんなものは、どうでも良い、俺は、彼
女が欲しい。

そう変な思いがわいてきた。

彼女が学校に来てからまだ2時間もたつていないので俺のこの思い
は、訳のわからないことを考えている。

そうしているうちに残り3分の休憩となつた。
俺は、次の教科の準備をする。

今日は、なんだか訳のわからない1日だつた。
朝来るはずの転校生が来なくて2時間目になつてから来て・・・
そのあと学活で一目惚れをして、俺の隣の席になつて。
そして、俺の理性が消えかかって
もう分けが解らんッ!!

俺は、ベッドの上でうつぶせになつたまま思考を停止した・・・
要するに眠りについた。俺は、馬鹿か・・・

私は、今日あつたことをまとめた。

部屋は、ゴミが溜まりに溜まつて足の踏み場がない。

今日は、転入生として彼の観察をした。
彼には、友達がいるようだつた。
私には、友達がまだいない作れるのかな・・・

そしてノートを閉じる。

朝学校に行くと彼女が靴を履き替えようと下駄箱にいた。

俺は、その様子をじっくりと眺めていたが恥ずかしくなつて挨拶をする。

「おはようーー！」

明るく、さわやかに・・・

「おはようございます。」

彼女は、下駄箱のふたを開けながら言った。

俺は嬉しかった。

彼女に目線を送ると彼女が下駄箱を開けて落ちてきた物を拾つている。

俺も一緒に拾う。それをいつ眺めてみる。ラブレター

今時こういう事をする人間は、少ないとthoughtていたのに・・・

どう見てもウチのクラスの男子どものラブレターだった。

その中に間抜け第1号のラブレターも発見する。

俺は、ラブレターなんぞ書いたことがないから少し不安になる。

もし彼女の好きな人がラブレターを書いていたら・・・俺の初恋が無惨にも破れる。

そう思つて彼女にラブレターの束を渡すと彼女は、それをゴミ箱の中にすべて目を通さずに入れた。

俺は、その光景に睡然としたが彼女が唇に指を当てて秘密よつとボーズしたので俺は、一切見なかつたことにした。

その日の昼休みに間抜けから悲しい話を聞くことになるのだがそのことは話さないでおこう・・・

「別話しても良いんだよーー竜凪・・・」

けつこう落ち込んでいる間抜けは、少しおとなしくなつた。
昨日に比べたらの話だが・・・

私は、今日もある人の観察にせいがない。けつじつこれもつかれる。・
・

母というのは、なんともじい仕事を押しつけるのだろう。

母は、女神とも言つて良い・・・

神様は、この世界には、存在する。

そして私は、天使？？かな

ゴミをためるのが大好きなんだげね。

仕事は、まだ内緒つて感じ――――

こんな口の利き方をすると母が怒るのでしない。

俺は、今日見た彼女の光景を信じられなかつた。

彼女に俺なんかが告白したところで棒に振られるだけだらうと思つ。

そんなに自信がない。

俺なんかが彼女のことを好きになるなんて絶対神様は許してくれないだらう。

この気持ちをビビッたらよいのだらう。

ここに来てもうすぐ1ヶ月になる。

私は、まだ悩んでいた。

仕事のためには、彼の話をしないといけないのだが・・・

まだ彼を見ておきたいとも思つてゐる。

部屋の掃除をした。

いつものゴミは、すべて捨ててしまつた。

母に、やればできる子ね・・・と言われたが嬉しくなかつた。

もうすぐ彼とお別れになるかもしけない・・・

彼女をずっと見ていた。ストーカーになるのかなこれって……。するとある1ていの時間に見えなくなることを知った。

ふつうの人間ではあり得ない……見えなくなることが。

昼休みいつも彼女は、図書室に行く。そして13：33になると姿を消す。

そして2分後の35分には、元の場所にいる。

人間ではあり得ない消え方……なぜそうなるのか不思議だつた。

私は、いつも2分間だけ行動を母に伝える。それが昼休みの時間そしてそれを彼が見ていることを知っていた……。いつも私を見ている彼……。

そう竜凪……私は、彼を観察している。

なぜ母が観察をしろと言ったのかは、仕事の話になる……。

前にも言つたとおり私は天使……天使は好きな人を作つてはいけないけれど、

ある一定の人物には恋に落ちて良いという。

それは、名字に竜という文字を持ち本人は気付いていないらしいが竜の血がその家には流れているらしい。

その竜と名の付く人に天使は、恋をして良いという……。

今回の私の仕事は、この田舎の中学校に在学する竜凪という人物を連れて帰ることだった。

竜凪は、白竜で翼は純白、家族は行方不明中だという情報だ。

私は、竜凪のことが好きになりつつあった……。

こう言つときは、どうしたらよいのだろうか。

俺は、彼女にどう告白したらよいか迷っていた。

ラブレターは、まず無理だらう。目の前で捨ててたしな・・・・・
口で言うのは、恥ずかしいし。
どうした物だろうか。

こういう事を考えると気持ちがブルーになる。

「ちょっと良いかな。」

声をかけてきたのは、あの彼女だった。

「はい・・・なんですか？」

敬語になってしまつ。

「あのさー今日の放課後あいてるかな・・・話したいことがあるん
だけど。」

クラスの男子の視線が強烈に降り注いでくる。
けど、断つたりはしない。彼女が言つてくれたんだ絶対にいい話が
待つてゐるに違いない。

「はいぜっひ・・・。」

カミカミになつた返事を聞いてか彼女は嬉しそうに笑つた。
俺は、放課後校門で待つことを告げて教室を移動する。
なんだか今日は、良い日になりそうだ。

私は、彼が素直に待つてくれることを考えていた。
色々話さないといけないし・・・

話したら話したで後々大変だし・・・・どうした物でしょうか。

俺は、放課後待ち遠しかつたがその前にこの体育の時間で相手を倒
さないときついなと思う。
俺が、彼女と話をしていたのを見て嫉妬した男子どもが俺に襲い
かかつてきているからだつた。

もつ、めんどくさいことになってしまった。

放課後私は、校門の前で彼を待つ。

さよならつと声をかけてくる男子たちをスルーする。

私の目的は、竜巣だけである。

遅くなつてしまつた。部活動も終わり先生に呼び出されて色々言わ
れそしてやつと校門に行けた。

遅くなつた俺を笑顔で迎えてくれた彼女は、後に付いてくるよつこ
と並ぶ。

あとについて2分ぐらゐ歩くと小さな公園に付いた。

そこは、遊具などは、一切無くただ、ベンチが一つ置いてあつた。
俺と彼女はそこに座る、なんだかデートでもしているようだつた。

「でつ、話してなんなんだ。」いきなり聞く。

「いきなりですね、あの私に付いてくれませんか。」

彼女の言葉がわからなかつた。付いてきたからこの公園にいるのでは
は・・?

「すみません、言つてゐる意味がよく・・・」

「あの、私たちの世界に来てもらえませんか。」

彼女は、必死に言つてゐる。

「世界つてこじやあないんですか?」

彼女は、泣きそうな顔になる。

「私・・・天使なんです。」

「はあ・・・」

「だから私たちの世界に来てくれませんか。」

「だから私たちの世界に来てくれませんか。」

「とつこことは、俺のこどが好きなんですね……。」

俺は、唐突に質問をする。

「違います・・・ただ来てください。」

そういうと彼女は、俺の後頭部を殴つて・・・・・・

目が覚めたらそこは、見たことのないところだつた。

俺は、まだ人間だ。だけど空には、物語に出てくるようなドラゴンが飛んでいたり・・・・

広い野原には、ユニコーンや見たことのない奴らがいっぱいいたり・

・

童話の中の世界つて感じだつた。

「ここは、何所なんだ??」

俺は、啞然として疑問を投げかける。

「ここは、まなじく真名小江と呼ばれる世界です。」

そういうのは、制服姿の彼女ではなく。

背中に羽の生えた美しい天使だつた。

「ここに連れてきたかったの・・・??」

「そうです。」

「何で俺は人間だよ。」

「いいえ違いますあなたは竜ここの世界の住人です。」

「つそだろ・・・・

「本當です。だからここに連れてきたんです。」

俺は、なんだか信じられない感覚を覚えた。

俺が竜だつて。そんなことがあるはずもない。

これは、夢だ・・・单なる妄想の夢なんだ。

だけど俺の目線がだんだんと高くなっているのに気がつき
手を見てみると白く人間の手ではないことに気づく。

「何で俺なんだ。」

「あなたは、こっちの世界で暮らす人間。私もそうなんです。」

「風魔、一つ聞いて良いか・・・天使は、人を好きになれるのか。」

「はい。今のあなたが好きです。」

「それは、お世辞じゃないのか。」

「いいえ、違います。天使が、好きになれるのはあなたのような竜
だけです。」

「何でだ?」

「解りません、だけど私はあなたのことが人間でも竜でも大好きで
す。」

「実は、俺もなんだ。」

俺は、竜になつた体で彼女を抱きしめる。
大きさは感じられないほど小さかった。だけど暖かさは感じること
ができた。

そう、俺はこの世界で生きていくことのために生まれてきたのだった。

私は、彼に抱きしめられながら思った。

もし人間で暮らすことになつても私は、もうゴミを増やすことは、無いだろう。

ゴミは、人間の世界にあって、私たちの世界にはない・・・。

本当は、そんな世界がないとしても。

竜の話は、本当は、存在しない私が天使だつて事も嘘・・・。

ただ彼が死なないように私の世界に引き込んだかつただけ・・・ゴミをこの世界では、ためてしまふ私を

守ってくれる彼を・・・

「ゴミを捨てる」と生きている彼を・・・。

(後書き)

なんだかよく解らなこよつなお話ができしまいました。好きなのに伝えられないもどかしさを書きたかったのに・・・物語が変な方向に転がつてしましました。この話、解らないなーと思う方は、どんどん感想書いてください・・本当に変な内容の小説ですみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3988d/>

Garbage Collect ~ゴミだめからの小さな話~

2010年11月25日17時35分発行